

テーマ：救いを語り継ぐ食卓

聖書：出エジプト記 12 章 21～27 節／マルコによる福音書 14 章 10～25 節

1, はじめに

食卓を囲んでいると、昔の出来事が話題になることはないでしょうか。あの時は大変だった、あの人に助けられた、、、など。その話を初めて聞く人も、何度も聞いている人もいるでしょう。共に食事し、語らううちに、誰かの経験が皆の記憶になっていきます。

今日の聖書には、神の救いを思い起こす過越の食事と、主イエスが弟子たちと囲まれた最後の食卓が出てきます。そこで何が語られ、何が受け継がれているかを見ていきます。

2, 出エジプト記 12 章：救いを待つ家々

かつてイスラエルの民は、エジプトで奴隷として苦しんでいました。神はその叫びを聞き、モーセを遣わして民を導き出そうとされます。12 章は、いよいよエジプトを出ることになる夜の出来事です。21 節でモーセは長老たちを呼び、家族ごとに過越の小羊を用意するように語ります。

22～23 節では、小羊の血を家の入口の柱と鴨居に塗り、朝まで家の中にとどまるよう命じられます。血のしるしを見た主が、その家を滅ぼす者から守られるのです。民は、自分たちの力で危機を乗り越えようとするのではなく、神の言葉を聞き、その守りに身を寄せました。

この物語には、イスラエルが救われる一方で、エジプトの初子が命を失うという厳しい面も含まれています（29～30 節）。救われた側の喜びだけを語ると、他方の家々の嘆きが聞こえなくなるかもしれません。なぜこのような死が語られるのか、戸惑いさえ覚えます。しかし、その疑問を抱えながらも、奴隷の苦しみからの解放を求める物語として読んでいきたいと思います。

3、子どもたちが尋ねるとき

24～27 節では、まだ旅が始まる前から、約束の地でこの儀式を守り続けることが語られます。子どもたちが、この儀式にはどんな意味があるのかと尋ねたら、神がエジプトで私たちの家を救ってくださったのだと答えるように、と命じられるのです。

ここで語り継ぐのは、先祖がどれほど立派だったかという話ではなく、苦しみの中にいた民を神が救われたという出来事です。後の世代もその物語を聞き、自分たちが何に支えられているのかを知っていきます。救いの記憶（物語）は、過去を懐かしむだけでなく、今の生き方を確かめる手がかりになります。

子どもの問い掛けが、この語り継ぎの中に置かれていることも大切です。「昔からそうしているから」で済ませず、尋ねてくるその声に耳を傾けて、何度でも意味を語り直す。今でいえば、誰かが礼拝や聖餐について素朴な疑問を口にするなら、それは、私たち自身が、何を受け継いできたのかを学び直すよい機会になる、ということです。

問い 礼拝や聖餐について「これはどういう意味ですか」と尋ねられたら、何を伝えたいでしょうか。自分でも改めて確かめたいことはあるでしょうか。

4、マルコ 14 章：裏切りが進む中で

前回読んだ香油の出来事に続き、10～11 節にはユダが祭司長たちのもとへ行く場面が記されています。マルコは、彼を「十二人の一人」と呼びます。主イエスを引き渡そうとするのは、共に歩んできた弟子です。祭司長たちは喜び、金を渡す約束をします。ただ、ユダがなぜ裏切りを決めたのか、その詳しい心の動きは語られていません。

12～16 節では、弟子たちが過越の食事を準備します。主イエスは二人を町へ遣わし、水がめを運ぶ人について行くように指示されます。そして家の主人が見せてくれる二階の広間で、食事を用意するようと言われます。二人は、主が言われたとおりの場所を見つけました。

ユダが引き渡す機会をうかがう一方で、主イエスは弟子たちと食卓を囲むための準備を進められます。そこには、不穏な動きの中でも、弟子たちと最後の食事を共にしようとする主の姿があります。マルコ福音書は、この食事を、出エジプトの救いを想起する「過越の食事」として描いています。

5、「まさかわたしのことでは」

夕方になり、主イエスが十二人と共に食卓に着かれると、共に食べている者の一人が自分を裏切ると口にしました。弟子たちは悲しみ、一人ずつ、自分のことなのかと

尋ね始めます。誰かを指さして責めるより先に、その言葉を自分に向けて聞いていることが印象的です。

同じ鉢に食べ物を浸し、同じ食卓を囲む、そのような相手から裏切られる。その痛みが、この場面にはあります。主イエスは、起ころうとしていることを知りながら、弟子たちと食事をしておられるのです。親しさと裏切りが、同じ食卓の上に重なっています。

21 節には、人の子は聖書に記されているとおりに去っていく、という言葉に続いて、裏切る者への厳しい言葉があります。主イエスに連なり神の救いの歩みの中にあっても、その恵みにあぐらかいていることはできません。主イエスの苦しみと、人を傷つけることの重さ、その両方を受け止める必要があります。

この後、ペトロは主イエスを知らないと言い、弟子たちは皆、主を見捨てて逃げます（30 節、50 節）。それをふまえると、この食卓にいるのは、最後まで忠実であり続けられる人たちではありません。それでも主イエスは、彼らの弱さを知りながら、パンと杯を手渡されます。私たちも、自分の「信仰の確かさ」を頼みにするのではなく、主イエスから受け取る恵みによって歩む者なのでしょう。

ただ、赦しや恵みを語るときにも、傷つけられた人の痛みを急いで片づけないようにしたいと思います。過ちを認め、相手の話を聞き、償いに取り組むことも、恵みに応えて生きる歩みです。

問い 弟子たちが一人ずつ、自分のことなのかと尋ねた場面をどう受け止めるでしょうか。過ちを見つめることと、主の恵みを信頼することは、どのようにつながるでしょうか。

6、裂かれ、手渡されるパン

22 節で主イエスは、パンを取り、賛美の祈りを唱え、裂いて弟子たちに渡します。そして、そのパンを指して、ご自身の体であると語りました。食事の中でなされたこの日常的な動作に、これから主が歩まれる道が重なっています。

弟子たちは、まず差し出されたパンを受け取ります。主イエスは、「十字架の意味をすべて理解できたか」と、彼らをの信仰を試してから渡したわけではありません。これから引き裂かれていく関係の中で、ご自身を彼らに与えておられるのです。パンを受け取る姿を思い浮かべると、信仰とは、「自分で成し遂げることに先立って主に養っていただくものだ」ということに気づかされます。

私たちも聖餐において、パンと杯を受け取ります。教会のために何かをする日もあれば、疲れて座っていることが精いっぱいの日、教会に足を運ぶ気力さえない日もあろうでしょう。いずれの日にも、まず主に生かされている自分を覚えたいと思います。そこから、隣人と分かち合う歩みも始まります。

7, 「契約の血」とは何か

23～24 節では、主イエスは杯を取り、感謝を献げて弟子たちに渡されます。そして、多くの人のために流される、ご自身の「契約の血」とであると語られます。「契約」という言葉には、神が民をご自分に結びつけ、民も神の言葉に应えて生きる関係が表されています。

この言葉の背景には、出エジプト記 24 章の契約の場面があります。モーセは神の言葉を民に伝え、いけにえの血を用いて契約を確かめました。12 章の血は、過越の夜に家々を守るしるしでした。24 章の血は、神と民の契約に関わるものです。

主の食卓には、出エジプトの救いと、神の民として生きる約束が、このように響き合っています。主イエスは、目前に迫るご自身の死を、人々のために命を差し出す出来事として語られます。人間の裏切りや暴力によって奪われる命を、主は、人を生かすために与える命として受け止めています。

マルコは、杯を渡された弟子たちが皆、それを飲んだと記しています。ここにはユダだけが途中で席を離れたという描写はありません。裏切りの予告を含む物語の中で、皆に杯が手渡されたことが心に残ります。彼らはこのすぐ後で、それぞれ主イエスから離れていきます。そのような彼らに、主ご自身が手を伸ばしておられるのです。

この食卓を覚えるとき、教会とは、自分たちの立派さを確かめ合う場ではなく、弱さを抱えながらも共に恵みに生かされている者たちの集まりである、ということに立ち返られます。

問い 主イエスからパンと杯を受け取る弟子の一人として、この場面を読むと、どの言葉や動作が心に残るでしょうか。聖餐で自分が受け取っているものを、どのような言葉で表せるでしょうか。

8, 神の国で新たに飲む日を待つ

25 節で主イエスは、神の国で新たにぶどうの実から造ったものを飲む日について語られます。最後の食卓には、別れと死の予告だけでなく、これから来る交わりへの約束もあります。弟子たちにとっては恐れに囚われる夜だったでしょう。しかし主イエスは、すでに、その先にある神の国に目を向けておられます。

聖餐では、主イエスがなさったことを思い起こすと共に、いつの日か神が完成してくださる救いを待ち望みます。今の教会には、悲しみも、すれ違いも、十分に支え合えていない現実もあります。しかし今見えている姿だけに囚われてはなりません。主が約束される「天での祝宴」を待ち望みつつ、一日一日を大切に歩んでいくのです。

9、私たちは何を語り継ぐのか

出エジプト記では、子どもの質問に答えて、神が家々を救われたことを語ります。マルコでは、主イエスがパンと杯をご自身のいのちに結びつけ、弟子たちに手渡します。神の救いは、言葉だけでなく、このように共に集まり、受け取り、食べるという共食を通して伝えられていきます。

なお、マルコのこの箇所には、記念として繰り返すようにという命令は記されていません。その言葉はルカ 22 章 19 節や第一コリント 11 章 24～26 節にあり、教会はこれらも合わせて読みながら、主の食卓を受け継いできました。

また、主イエスも弟子たちも、イスラエルの救いを覚える食卓を囲んでいたことを、あらためて心に留めたいと思います。キリスト教では過越の祭りを祝いませんが、その祭りの意義を忘れてはなりません。ユダヤの信仰の中にある救いの記憶を尊びながら、主の食卓とのつながりを確かめたいと思います。

私たちが次世代や人々に手渡すのはなんでしょうか。これまで教会が成し遂げてきた目に見える働きも確かに恵みです。しかしまた、目に見える分かりやすい成果だけでなく、迷いや弱さの中で、どのように主に支えられ、人に助けられてきたか、という視点も大切でしょう。

そのようなことを語りつつ（証ししつつ）、初めて訪れた人の話（人生の物語）にも耳を傾ける、、、そうした交わりの中で、救いの物語は私たち自身の歩みとなり、また次の世代につながっていきます。

問い これまでの教会生活で受け取ったもののうち、次の人に伝えたいことは何でしょうか。話すことだけでなく、共に過ごす中で伝わるものも考えてみたいと思います。